

令和7年度 第3回インクルーシブ教育推進委員会 議事録

□開催日時：令和8年3月13日（金）14時00分～16時00分

□開催場所：多治見市役所駅北庁舎 4階第2・3会議室

□出席者（敬称略）

・委員：宇野宏幸・中野正大・山本亜弥(代理)・水戸志保・伊藤桂子・安田孔美
三尾葉子・岡英樹・蜂谷鋼・鈴木由貴・渡辺真弓・長谷川昌子・伊藤佳苗
大島由起子

・事務局：仙石 教育長・矢野 教育次長・立間 教育相談室指導主事・山中 教育相談室指導主事
前村 こども家庭課総括主査・森本 福祉課主査・御前 保健センター保健師
長谷川 こども家庭課障害児巡回支援専門員

1 挨拶

教育長挨拶

2 報告・検討

(1) 事務局より報告・説明

基本施策1 一人一人の教育的ニーズの把握と、それに応じた指導・援助の充実

・多治見市発達検査に関わる「後追い調査」について

基本施策2 連続性のある「多様で柔軟な学びの場」の整備

・通級指導教室の利用児童生徒数の推移、通級指導教室研修会について

・特別支援学級の設置申請と認可状況について ・交流籍交流の取組の推進について

基本施策3 教職員の専門性の向上を図る研修の充実

・キキョウスタッフ研修について

基本施策4 就学先決定の仕組みと教育支援の充実

・保護者への情報提供について

基本施策5 一貫した支援の取組

・スマイルブック引継会について

基本施策6 諸機関との連携強化

・特別支援学校の「地域センター的機能」を活用した訪問について

・発達支援センターわかばと幼稚園・保育園との連携について

(2) 意見交流

中野 委員：① WISC-Vは全国的に実施されているが、弊害が学会で問題視されている。WISCの結果がすべてというとらえ方をされる傾向があるが、子ども評価の一つの資料に過ぎない。WISCでは主に認知能力を測るが、子どもには、数字で表せない非認知能力（探求心・優しさ・情熱など）がより大切。それがないがしろにされている傾向はないか。WISCの結果は一つの資料としてとらえ、子どもの背景を知った上で結果を評価する必要がある。

② ワーキングメモリーについては、言語的ワーキングメモリーと視覚的ワーキングメモリーを分けてとらえる必要がある。

③ 「後追い調査」の回答中に、WISCの結果から学力を判断する記述があるが、WISCの結果で数値的IQは高くても、学習への興味関心がなければ学力は高まらない。それを引き出す支援、非認知能力を高める支援が大切。

④ 「後追い調査」の回答に、「支援を継続中」のコメントが多いが、支援の結果を記入してもらおうとよい。

伊藤桂委員長：(支援は) 短期間では結果が出ないことも多い。非認知能力を測ることはできるか。

中野 委員：難しい。日常の先生と子どもとのコミュニケーション、観察等から総合的に評価すべき。

伊藤桂委員長：(基本施策6) 連携についてはどうか。

安田 委員：福祉(放課後等デイサービス)との連携について。教育と福祉との連携の内容について、教員が知っておくとよい。不登校の子の支援について放課後等デイサービスの職員と連携を図った。家庭の状況や本人の課題、よさ等を共有し、何を支えるかを相談した。放課後等デイサービスに本人の送迎を依頼し、保護者と放課後等デイサービスと学校とが同じ方向を向いて、本人を共に支えていけるよう共通理解をして進めた。学校では教頭が他機関との窓口になることが多いが、放課後等デイサービスの支援の内容を知ることが連携につながる。事例を通して、(連携のよさを) 広げたい。

中野 委員：不登校の子は放課後等デイサービスで支援を受けられないと聞くが、事実か。

山本(代理)：変わってきた。ケースによって柔軟に対応している。

中野 委員：学校に行けない子は、学校に代わる場所に行けばよい。その一つが放課後等デイサービス。その対応は多治見市だけか。

山本(代理)：他市も同様。

渡辺 委員：幼稚園で、「児童発達支援センターわかば」との連携が充実している。特別支援コーディネーター研修会で、副園長が「わかば」を見学し、その支援の様子を自園で共有して、支援に生かしている。「わかば」ではペアレントトレーニングも行っており、ありがたい。「保育所等訪問支援事業」も、支援の迷いに対するアドバイスをいただくことができ、園での支援内容の充実につながっている。

鈴木 委員：市内中学校で特別支援学級の親の会を開催。不登校生徒の保護者の進路に関する不安に対し、学校から「わかば」や「放課後等デイサービス」の紹介があり、見学した。他にも「けやき」の見学も計画中。この先の人生で、いろいろな機関と関係を作り、その力を借りて一緒に考えていくことが大切。福祉との連携について、各学校で提案ができるとよい。

宇野 委員：①子どものアセスメント(見立て)について、WISCはフォーマル(公式の)アセスメント。子どもの実態をどう理解するかから始まり、どんな支援・配慮につなげたかについて、「後追い調査」でまとめた。その支援・配慮の結果がどうだったか(評価)までの一連の流れを地域・校内で共有し、知恵として残していくことが大切。

②連携について、「わかば」が支援の中核的機能を果たし、就園・就学のサポート等、存在感が年々大きくなっている。ペアトレにより家庭との連携にもつながっている。

③学校内にWISCの結果を読み取れる人が必要で、特別支援教育コーディネーターや通級指導教室担当教員などが担うとよい。WISCの読み取りから、どう授業や指導に生かすかへつなぐ、つまりWISCの結果の翻訳をする人材の育成をしたい。

④これまでは認知能力重視であったが、今後は、非認知能力が重視される。学校全体で育てたい。小中学校の総合的な学習や高校の探求の学びが大切。それぞれの子どもの興味・関心を生かすよう、学校教育全体の動向を見ながら、非認知能力の育成を大切にしたい。

～ 休 憩 ～

3 多治見市の授業づくりの取組から来年度に向けて

(1) 教育研究所より多治見市小中学校の授業実践事例の紹介(教育研究所 大蔦 指導主事)

○主体的・対話的で深い学びの実現、子ども主体の楽しい授業づくりをめざした実践

- ・どの子にとっても「わかった」「できた」が実感できる最適な学びになるように
- ・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向け、誰とどう学ぶかを自分で選ぶ
- ・ICTの効果的な活用

(2) 意見交流

宇野 委員：これまでの一斉授業から変わり、それぞれが学んでいる姿があった。とにかく子どもが楽しいと思える授業をめざし、遊びとつなぎ、遊びの中で学ぶ様子があった。

渡辺 委員：驚き。とても楽しそう。(学習が)得意ではない子も興味をもちそう。興味・関心をもつことが大切。

宇野 委員：幼稚園でも、皆が同じ活動でははみ出してしまいう子もいるだろうが、それぞれの遊びを尊重すると、皆がやれる。

長谷川委員：(保育園でも)一人一人の遊びが違い、伸びるところも違う。得意や苦手で差もある。小学校との交流で、心配していた卒園児が、先生にフォローしてもらいながら伸び伸びと楽しそうに活動していた。普段の学校の楽しい授業が生きている。

宇野 委員：これまでは、園でのびのびしていても、小1になるとビシッとしなければならず、発達障がいのある子にとっては厳しい面もあった。

大島 委員：とても楽しそうな授業ではあったが、iPadばかりでは字を書く機会が減り、字が書けなくなってしまう。バランスが難しい。できる子とできない子があるが、障がいのある子ばかりに焦点があたらないように、それぞれの子の能力に合った学習の時間を確保する必要がある。

宇野 委員：デジタルとアナログの使い分けが必要。

安田 委員：学校では、子どもたちが取り組みやすい、興味・関心をもったところを大切にしつつ、バランスをとりながら進めている。AIドリルも、子どもの発達段階を考慮し、保護者の意見も参考にしながら導入の仕方を検討している。

宇野 委員：それぞれの子に合った学習ができるかという点について、先生に相談する子もいれば一人でやる子もあり、大丈夫ではないか。

蜂谷 委員：子どもが選択して学習に向かうことができるようになることがよいが、様々な課題もあり学級全体に学びに向かう雰囲気がないと成立しない。最低限の規律や学びに向かう雰囲気づくりを日常的に行うことが必要。簡単にできるわけではない。(教員としては)どうしても全員に学んだ内容の確認をしたくなり、終末場面は従来の形になってしまうことがある。子どもたちに任せる部分と教師が出る部分をはっきりさせて、最適解をめざしたい。いろいろな子のどこに焦点を当てるか、すべての子にとっての充実した学びは難しい。様々な実践から学ぶことが(教員にとって)大切。デジタルとアナログの共存、使い分けが大切。

宇野 委員：学級の雰囲気は欠かせない。子ども同士の学び合いのためには心理的安全性を醸成したい。

三尾 委員：特別支援学校でもタブレットを使用。ツールとして友だちと関わる道具の一つ。音やキャラクターの動きなどが学びの興味・関心につながっている。操作にもよく慣れている。通級指導教室に通う子から、授業中に「友だちと一緒に考えよう」という場面が多すぎて困るという相談を受けたことがあったが、多治見市では学び方を選べるのがよい。「書く」ことも様々な様相があるので、選択できるとよい。

宇野 委員：自分で選べることが大切。それがむずかしい子は先生が提案すればよい。

安田 委員：人と関わることでできるようになる実践事例の紹介。共に取り組める活動・場があり、それを支える人がいることが大切。友だちの存在がやる気を生む。

伊藤佳委員：我が子が、小1～6まで小学校へ居住地校交流に毎週行き、母も参加した。周囲の子どもたちが、車いすでもしゃべれなくても、教室の一員として、障がいではなく一つの個性・特徴としてとらえてくれ、まさにインクルーシブであった。周りの子にとっても学びになったと言ってもらえた。多治見市はいろいろな子に合わせた教育が進んでおり、すばらしい。さらに、不登校でもオンラインで家から授業に参加したり、支援学校と通常学校との垣根をなくし、どの場所でも学べるようにしたりする多治見市の未来を想像した。

伊藤桂委員長：はみ出す子もやっつけける授業を行いたい。いろいろな学び方を受け入れてもらえると、どの子も充実感を味わえる学校になる。ただし、一人も取り残さないために、どこまでや

るかの見極めが大切。全員の同じ学びは無理なので、その子なりの目標設定があってもよい。多様な学び方とその子なりの目標設定があると、皆が共に学べる。

宇野 委員：それぞれで学習目標が違っていてもよい状況が、インクルーシブにつながる。

山本 委員（代理）：どこに目的をもっていくか。教育は学び・好奇心を引き出す営みだが、福祉は手段にこだわらず、個々に応じた支援を探ることで正解や間違いがあるわけではない。学校では、先生たちの適応能力が求められており難しそう。事業所に来る子どもが、同世代の友だちの中で、意欲や興味・関心を上手に引き出せたときぐんぐん伸びる様子があった。どこに目的をもってくるかが大切。

宇野 委員：これまでは、社会に出たときに困らないようスキルを身に付ける教育。これからは、それぞれの子どもの自分らしさ、自分らしい生き方を念頭に置き、楽しく学ぶ教育。

中野 委員：発達障がいの子は発達にでこぼこが大きいのが、人と環境に恵まれれば成長する。個性や特性を理解してもらえ、発見してくれる人と環境に恵まれるとよい。保護者も教員も成長を急ぐ傾向。一喜一憂せず長いスパンで見られるとよい。長い目で見られる環境を社会全体で作りたい。よさを発見されると成長する。いっぱい変化やよさを見つけ声かけをしてほしい。子どもが教員や親にほめられることが少ないことが残念。積極的にほめたい。

宇野 委員：教員は、待つことも大切。

①その子のよさを発見すること。自分でよさを発見できるようにすること。それが自己理解につながる。自分のよさや合っているものを見つける支援をしたい。

②子ども同士の力を信じ、自分たちで学び合いよりよいものを作っていく場を作ることが大切。

4 挨拶

教育次長挨拶